

寺島実郎学長主宰インターゼミ（社会工学研究会）

経営情報学部3年 濱島 健吾

私は、寺島学長が直接主宰するインターゼミ「社会工学研究会」に所属している。インターゼミでは、課題を見つけ、課題に対する最善のアプローチを考案し、文献やフィールドワークを通し、一つのチーム論文を書き上げる。選択必修のホームゼミと大きく異なっているのは、学部生のみならず、大学院生、OB・OGの方々も参加しており、様々なバックグラウンドを持つ方々と議論を交わし、調査・研究を行っている点だ。学長も含めて13名の教授陣が担当し、ゼミの内容以外にも多くの事を教えて頂き、実社会についても学べる。こういった環境が大学にあるのは珍しい。実際の活動は、テーマごとに幾つかのチームに分かれる。私は以前から興味があった「地方再生」チームに所属する事にした。

インターゼミは「知性」を鍛える最高の場。回を重ねる毎に、「日本の各地域、とりわけ地方の潜在的な魅力は何であるのか、どうしたら、その街は更に活気づくのか!」と、ゼミを離れた時でも、地方創生が気になるように私の意識が変化していった。地方創生を考える上で大事な点は、他人事と思わずに自分事として考えることであると、私は思う。日本の人口は、今のペースで減少し続けると、西暦2100年には約5200万人、2500年では約44万人、3000年には1000人になると試算されている。私は数値の低さに驚き、この現状を食い止めたいという気持ちが自然に沸き起った。そのために、学生ならではのアイデアを出して、地域に少しでもプラスになるような成果を出したいと思った。その活動の中心となる場が「インターゼミ」である。自分にとっての地方創生は何であるのか。「自分×地方創生」を常に意識している。

地方の課題は山積している。地方創生の為に、全国各自治体が力を入れ、様々な活動を行っているが、なかなかうまくいっていないのが現状である。地方創生は、高齢化問題とも密接に関係している。国を挙げての課題なのだ。地方創生を考える上で中心都市＝東京を考える必要がある。人口が集中している東京であるが、出生率の低さを見れば、子育てに適した環境とは言い難い。求人数は多いが、それぞれの職場にやりがいのある仕事や心地よい人間関係が構築されているとも限らない。ならば、地方の若者は一体何を求めて東京に移動するのか。その理由を突き止め、東京へ移動する以外の選択肢を現代の若者に与える必要があるのではないだろうか。

昨今、マーケティングやウェブデザインなどインターネット関連の仕事をしている人は増え続けている。それらの仕事は、地域を選ばずに来れるのであれば、都会ではなくあえて地方を選ぶ人が今後ますます増えてくると思う。はて、都会の魅力は何であるのか。「若者の街・

渋谷」と言われている渋谷に商業施設がなかったら、人は来ないのであるか。多くの若者は、地方に魅力を感じていないわけではなく、働き口の少なさ、農業などの第一次産業の雇用の偏りなどで、若者が理想とする働き方を描けないのかもしれない。

2040年に20-39歳の女性人口が半分以下になる自治体で、存続が危ぶまれると指摘された数は、896市区町村にものぼると言われている。この数値がどれくらいのものかという、全国市区町村1741の51%である。日本には様々な町があるが、各地域はどのような現状になっているのか。そういった部分をインターゼミで深堀りしている。具体的には、地方へ出向き、その地域の人々から直接話を聞くフィールドワークを行っている。例えば、地域の力を結集し、「産業づくり」の成功例である国産旅客機「MRJ」－その翼の角度を決めるセンサーを製造している長野県飯田市の航空部品メーカー、多摩川精機株式会社の方に話を伺った。多摩川精機が中心となり2006年に立ち上げたのが、飯田航空宇宙プロジェクト。「地域を活性化して、人口減少を食い止めよう!」と、地場の中小企業25社が精密機器で培った技術を結集し、航空機部品ビジネスに挑戦したものだ。私がインタビューしたH氏は飯田市で生まれ育ったが、大学進学は東京へ、就職先も東京近辺で探していた。就活の合間に帰省した際、あらためて飯田市の良さや地元にいると落ち着く自分にも気づき、飯田市に戻る決意をしたのである。そして、多摩川精機にUターン就職をした。「飯田市のような小さな町でも、日本の最先端プロジェクトに携わる事が出来、世界と繋がっていて、とても充実している。地元が好きになり、「飯田市」をもっとアピールしていきたい。」と若いH氏は目をキラキラさせて語ってくれた。

私はインターゼミを通して、地方創生に興味がある学生と一人でも多く交流したいと思うようになった折、「多摩未来奨学生プロジェクト」を知り志願した。このプロジェクトは、産官学連携のプロジェクトであり、多摩地域の各大学・短大から選抜された学生が1年間かけて「多摩の活性化」を考えるものである。幸いなことに、私は今年度、プロジェクトに参加する機会を得、他大学の人達と共に活動している。「多摩の活性化」＝多摩大学の地元を活性化することであり、正に、インターゼミで培ってきたスキルや経験を活かせるチャンスである。

インターゼミでの学びによって、私の考えは変わり行動も変わった。そして今、多摩地域のプロジェクトに携わることによって、ますます、私にとってのインターゼミは、実践により近い「学び」と「パワー」を吸収できる場となっている。



九段サテライトにて「地方再生チーム」のディスカッションの様子



2016年 フィールドワーク調査時 千葉県 南房総市

異文化に魅せられて

グローバルスタディーズ学部 4年 山口 夏実

小学校の頃からテレビで他国の情報を得ると地図で該当国や周辺国を確認する習慣があった私は、次第に異文化へ関心を持ち始めました。大学では異文化と国際関係学を学びたいと思い多摩大学グローバルスタディーズ学部（SGS）へ進学しました。

SGSの魅力は学生と教授の距離が非常に近い点と英語で講義が行われる点です。少人数制に拘った講義形式は講義出席に対する学生の意欲向上と教授へ気軽に質問が出来る環境が整っています。入学後、SGS内部では海外経験のある同期や先輩、また講義でお世話になっている教授に海外での体験談をたくさん伺い、また教授に進められた外部のシンポジウムやセミナーにも積極的に参加し、SGS内外合わせて非常にたくさんの方から大変興味深いお話を伺うことができました。中でも様々な「価値観」へ興味を持つと同時に、真の異文化理解とは「価値観」に影響を与える文化や習慣を知る必要があると感じ留学を決意しました。

私が留学計画を進めるにあたり非常に苦悩したのは留学先の選択です。1. 留学は必ず交換留学で、2. 1年以上（2学期以上）行い、3. 今の自分に一番必要かつ厳しい環境にすること、以上の3つの条件を設けました。

1つ目の交換留学は「価値観」の共有を行う上で重要なポイントでした。以前短期語学留学を経験したときは参加者の多くが日本人であったことや、英語を学びに行く留学ではお互いの英語レベルでは複雑な話をするのに大変難しいと実感したからです。

2つ目の1年以上留学を行う点は、文献等で留学は1年いかなければカルチャーショックを乗り越えた先にある異文化理解まで到達できないと聞き、1年以上の留学に拘りました。

そして3つ目の今の自分に必要かつ厳しい環境にする点。これは新しいことに挑戦することを避けてしまう自分を変えたいという強い思いと、受講していたインターゼミにて寺島実郎学長がおっしゃった「若いときに死に物狂いで努力し、その困難を乗り越え手に入れたものだけに本物の価値がある。」という言葉に感銘を受け、自分も学生の間にあえて厳しい環境に飛び込む必要があると強く感じました。

以上の3点を全て満たしつつ、自分の身近にはないイスラム文化について学べるインドネシアへの留学を決意しました。インドネシアは親日国家で、世界最大のイスラム教徒（ムスリム）数を抱える国ですが、実はイスラム教だけでなく、仏教、キリスト教、バリ・ヒन्दゥー教など多宗教国家かつ民族間のアイデンティティが強い多民族国家でもあります。何よりまだ多摩大学から留学した学生がいない留学先でした。そのため現地に関する情報が全くなかったため、本やインターネット、インドネシアに訪問経験のある方にお話を伺い、漠然と現地の生活環境をイメージし、

期待と大きな不安を抱きつつ一人でインドネシアへ渡りました。

時間はルーズ、世界最悪といわれる首都ジャカルタの交通渋滞は30分の道のりを時には5時間の長時間移動へ変貌させ、インドネシア語が分からず1つ1つ翻訳しながらメニューを選んだランチの注文には1時間を要しました。大学ではシステムが複雑でよく理解ができないにも関わらず、英語が上手く話せなかったため苦しい毎日を過ごし、5時前にムスリムのお祈りの時間になると流れる独特の音楽が目覚まし代わりの生活でした。また履修可能と説明されていた私の専門科目は、そのセメスターでは英語で開講されないからと履修できなかったりと現地で起こった問題は枚挙に暇がありません。

これらの問題を解決したのは根気強く何度も交渉する姿勢、日本の常識が全く通用しない環境を思いつき楽しむ気持ち、そして日々ゆっくりと成長する自分を焦らずに受け入れた点が挙げられます。80人近い留学生の中で一番英語が話せない自分が恥ずかしく人前で話したくない！と思うことももちろんありましたが、拙い英語であっても自分の意志をはっきりと伝えることを常に意識していました。自分の意志や考えを発信することは自分の価値観を相手に提示することであり、時には思いもよらない人と自分が繋がるきっかけが生まれ、新しいことに挑戦する絶好の機会になりました。

そして東南アジアの多様性と異文化に魅せられた1年でした。シンガポール、マレーシア、タイ、ベトナムのそれぞれの首都へ足を運び、ジャカルタとの経済成長の違いを肌で感じる事が出来たことは、東南アジアへ留学したからこそ出来た学びです。またマレーシアでは多摩大学を代表して提携校のテイラーズ大学で開催されたAsia Pacific Student Leaders Conference 2015に参加し、東南アジアのみならずオーストラリアや東アジア、12の国と地域から集まった学生とディスカッションや文化交流をしました。各国の学生が集まったディスカッションでは出た意見が様々であったため、それぞれの考えを尊重しつつ、最終的にグループで一つの意見にまとめることの難しさと全員が妥協できるラインを素早く見つける重要性を痛感しました。これは将来海外で仕事をしたいと思っている私にとって非常に学びの多い経験となりました。

現在は留学中に会った多くのムスリムの友人が持つ強い訪日願望とハラールフード（ムスリムが口にすることを許されている食材のこと）対策への不安を耳にし、日本のインバウンド事業のハラール対策について研究しています。今後も自分と他者について常に考える姿勢を忘れず、自分に出来ることを真摯に取り組み、よりよい社会を築く一員でありたいと思います。



Asia Pacific Student Leaders Conference 2015にて参加者全員民族衣装に着替えて行われた記念撮影



カフェを貸しきって開催したオランダ人とスイス人留学生の誕生日パーティー

〈木村知義プロジェクトゼミ〉

メディア実践論の制作現場から

「家族の肖像、ボクのじいちゃん」を撮る

経営情報学部 2年 入口 義之

「やることないならこのプロジェクトゼミ取ってみれば？」

私がこのプロジェクトゼミに参加するきっかけは友人のこの一言だった。当時私は、ある履修制限科目を受講しようと呼募したが、抽選ではずれてしまっていた。授業一覧表を広げて考えても見つからない。友人に相談してみた。そこで勧められたのが「メディア実践論」だった。

どんなゼミなのか不安があったが教室に行ってみた。教室には見たことのない先生と数人の上級生もいた。不安がさらに増した。先生は私に「君の名前は？」と尋ねてきた。「事業構想学科2年生の入口義之です」と答えたら、「入口君はこのゼミを履修するのかな？」と。どうしようか迷っていたのだが、その場の勢いで「はい」と答えてしまった。

興味や関心のあることをテーマに企画を立て、取材、撮影をして作品にしてみようというゼミだと分かったのは、参加を決めた後のことだった。映像制作の経験などまったくない私はやりきれぬか心配になった反面、自分が撮ったものを映像として残せるのはとても面白そうだと感じた。心の中で、やってみようと思いが固まった。

カメラの使い方を学んだり、企画を発想する刺激にと番組を視聴したり、先生の経験談を聞いたり、とにかく教室は充実していた。しかし、私には1つ越えなければならない壁があった。それは、映像制作をするにあたって「ネタ」が無いということだ。撮りたいものがパッと思いつかない。一生懸命考えても思い浮かぶものが無かった。

そんな日々が続く中、ピンと響く番組に出会った。制作プロダクションでADとして働く青年が、自分と家族をテーマに、はじめて撮ったドキュメンタリーだった。カメラワークもぐちゃぐちゃで、所々雑音も入っている。しかし、見続けていると、徐々に惹かれていく何かがあった。それは家族と周りの人たちの温かさだった。見ている私もとても温かい気持ちになれて、いつの間にか見入っていた。私も映像を通じて、人間の温かさを感じ取ることができれば作品を作りたいと思った。そして、「ボクのじいちゃん」をテーマにしようとした。

なぜ、じいちゃんなのかと言うと、人柄がとても良いから、という単純な理由だ。誰にでも常にニコニコしながら優しく接し、時にジョークを飛ばして、相手がどんな人であろうと笑顔にする力をもって、とても温かみのある人だ。じいちゃんの良いところを撮ってみようと思えば、どんどんイメージが広がった。

じいちゃんは、ばあちゃんと2人で「自動車屋」を営んでいる。新車、中古車販売をはじめ車検、修理、板金修理、各種保険代理業務、レーシングカート販売、メンテナンス、サーキットサービス・・・とにかく車に関することならなんでもござれ。朝から晩まで仕事に打ち込んでいるじいちゃんは、まさに「車の職人」だ。そんなじいちゃんの仕事風景を撮ってみたいと思った。なぜこの仕事に打ち込んでいるのか、じいちゃんにとって仕事とは何か、70歳近くになる今も元気に仕事を続けられる秘訣は、などなど・・・もっと深く考えたらもっと色々撮ってみたいところ、取材したいことが出てくるかもしれない。

こんな風に、どんな作品を作ろうかと考えている時間がとても楽しいと感じるようになってきた。この感覚が、映像制作の魅力であり面白さなのかな、と思った。

この夏、私は人生初の映像制作に挑むことになった。



大好きなじいちゃん、ばあちゃんと



朝から晩まで車を相手に働くじいちゃん

『“耳すま”散歩』制作を通して、多くの学びと発見

経営情報学部 2年 前川 瑞稀

「あなたが撮りたいものは何？とにかく書き出してみよう！」

ゼミが始まったとたん先生は模造紙を広げて言った。全然思いつかなかったが、友達と一緒に考えた末「きれいな風景を撮りたい」と書き込んだ。これが私の「メディア実践論」のはじまりだった。

しかし「きれいな風景」だけではテーマにならない。もちろん普通に風景を撮ってもなにも面白くないということはわかっていたが、いざテーマはとなると考えこんでしまった。そしてたどり着いたのが、ジブリ作品『耳をすませば』だった。大学に入学した時、聖蹟桜ヶ丘が『耳をすませば』の舞台になっていると聞いたことを思い出したのだ。それほど詳しく知っている作品ではなかったが、大学と同じ多摩地域の聖蹟桜ヶ丘であり、多摩を知る上でも大切な1歩だと思った。

撮りたいものが決まったら、撮りに行く前に構成を考えなければと習ったが、これがとても難しかった。加えて、一緒に考えてきた3人の共同制作として取り組むことにしたので、ここはとても時間がかかった。タイトルは『耳をすませば』のロケ地探訪、『“耳すま”散歩』とした。

撮影当日、まず聖蹟桜ヶ丘駅へ。天気は上々、いよいよ『“耳すま”散歩』のロケスタート。前もって計画を立てていたので、はじめは決めた順序通りに一つひとつ撮っていった。少し慣れてくると、「これ使えそう!」、「これ撮りたい!」と思う場所やシーンがわかってきて、撮る面白さを実感。さらに余裕が出てきて、どう撮ったらこの風景をきれいに伝える事ができるのかを考えるようになり、撮りたいアングルやカメラを動かす速さを工夫してみることに。「ロケってなかなか面白い」と感じるようになっていた。

しかし、物事はそう甘くはない。『耳をすませば』のロケ地巡りをしている人に話を聞こうと構成を描いていたが、天気が良くて休日だというのにそこを歩いている人がいない。そういえば、リサーチが大事だと先生から言われていた。前もって現場に出かけて調べておかないとせっかくのロケ計画も崩れてしまうことを学んだ。

途中で立ち寄ったお店には『耳をすませば』のファンが作品への想いやロケ地を巡った感想などを書くノートが置いてあった。大人から子供まで男女問わず多くのファンがこの場所を訪れていて、みんなから愛されている作品だということが伝わってきた。

インタビュー取材については聞く内容をあらかじめ考えて、出だしの質問も決めてあったが、相手の答えから気になったことをもう一歩踏み込んで聞くことができなかった。しかし、こういうこともあるよと教えてもらうこともあって、現場に立つことで、多くの新たな発見があった。

ビデオカメラをもってロケ取材をするなどというのはこれが初めての体験だった。全くのゼロからのスタートだったが、とても貴重な体験になった。編集作業はまだ終わっていないが、早く作り上げて、見る人にジブリ作品『耳をすませば』の世界に少しでも興味を持ってもらい、そのロケ地の聖蹟桜ヶ丘に足を運んでもらうきっかけになればと思う。

最初の企画・構成から最後の編集まで、3人が協力して一つの作品づくりに挑戦する楽しさ、難しさもふくめ、本当に良い経験になった。

もともとメディアに関心があってこのゼミに参加した私にとって、この制作を通して、メディアへの問題意識が一層深まったことも大きな成果だと思う。



『耳すま』ゆかりの青春ポストからロケスタート



物語のクライマックス「耳耳」からの眺め

ジャン・バプティスト ピグレ / ジョセフ エリソン

We are Jean-Baptiste and Joseph, we are French and we did a four month internship in Saito Sensei's seminar. We are students in 3D graphics and Game design.

The experience of coming to Japan was probably the best way to discover the expectations of the Japanese viewing. Indeed, Japan is very powerful in the development of the game industry and otherwise in the new technology. Saito T. Sensei offered us the opportunity to understand how much the difference between the modern and the traditional culture influence the arts and the architecture.

After 4 months in Tama, in internship in the Saito Sensei's seminar, we finally came back in France to continue our life of junior game designer. We have never been as far as there before, the desire of meeting a totally different culture and particularly this one where is born a lot of the most popular anime movies gave us as much reason as we needed to leave our family and our friends for this summer.

We were very glad to meet all of the students of her seminary: working in "Tama New Town" project with Masa and Toshi, Doing samurai cosplay with Kaneki and Daigo, and drinking and having fun in party with everybody was very good moment that we really enjoyed spending together. Actually we felt that this four month passed in one week, we are looking forward for a next trip in Japan.

ジャンとジョセフです。フランスのUCO ラバル 3Di 大学で、3D グラフィックスとゲームデザインを勉強している学生です。

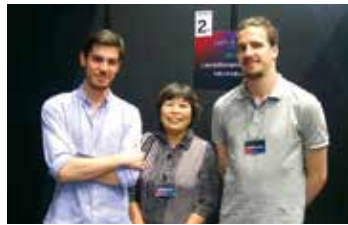
私たちはフランスから4ヶ月のインターンシップで彩藤ゼミにいました。この留学は、日本のことを学ぶのにとってもいい機会でした。日本ではゲーム開発やその他の新しい技術開発も大変パワフルでした。彩藤先生は、芸術や建築に影響を与えている日本の近代文化と伝統的文化の違いに気づかせてくれました。

今、フランスに戻ってゲームデザイナーの卵としての生活に戻ったわけですが、以前とは違います。まったく違う文化に触れたこと、特に人気のアニメムービーが生まれる場所にいられたことは、何より家族や友達とも離れて日本に行った意義がありました。

ゼミの学生たちとのつながりも出来ました。「多摩ニュータウン」プロジェクトでのチームだったマサとトシ、侍コスプレを一緒にしたカナキとダイゴ。飲んだりパーティをしたゼミ生たちひとりひとりと一緒に過ごせてとても楽しかった。この4ヶ月はまるで一週間で過ぎたかのような気がします。ぜひまた日本に行きたいと思います。



小田原城にて侍コスプレ



ジャン・彩藤先生・ジョセフと一緒に



六本木ヒルズ ジブリ大博覧会にて猫バスに乗車

※出原至道ゼミの留生活活動報告は、Rapport No.95 4面をご覧ください。

多摩大学経営情報学部学生会執行部 ～活動紹介～

KTC (Keep Tama University Clean)

経営情報学部 学生会会長 2年 田倉 大雅

今年も開催時期がだいぶずれ込んでしまいましたが、6月にKTCを開催することができました。KTCは、学内や学外を既存のサークルに協力してもらい掃除するという企画です。今回は、テニスコート周辺の芝生とサークル棟の掃除をしてもらいました。テニスコート周辺には、多くのテニスボールが散らばっておりそのボールを回収してもらい、サークル棟では、目立ったゴミが無いものの頻りに掃除をしていないので埃がとて多くありました。学生会主導のこの企画も三年近く開催しているので学内でもゴミが少なくなっています。KTCの在り方を見直さないといけないなどと思いつつ、効果が見え始めているのでとてもうれしい傾向だと思えます。



音楽連合によるアコースティックライブ

バーベキュー大会

7月29日に学生会主催のバーベキュー大会を開催いたしました。このイベントは、学生会の中でも一番長く続いており、一番多くの集客数が期待できるイベントです。今回の参加者の数が昨年より大幅に増え、とても盛況でした。参加者が増えていたので、順調に認知度を上げてイベントとしていい具合に仕上がってきたなと思い、今回も多くの学生や教授にお越しいただき、とても満足して頂けたようです。教授、学生からも楽しかったとの言葉を聞いたので、このイベントは成功に終わることが出来ました。さらに、招待と言う形で多摩大学・湘南キャンパスの学生会の方々をお呼びしました。湘南キャンパスでは、バーベキュー大会を企画していないようでとても新鮮な感覚で喜んでもらえました。



参加者たちの食事風景